

令和5年度 第1回三田市地域福祉審議会

議事録

日時	令和5年8月3日(木) 10時00分～12時00分
場所	市役所本庁舎3階302会議室A
出席者	川本会長、畑副会長、大島委員、岡本委員、戸出委員、古田委員、安田委員、米井委員
欠席者	川邊委員、土取委員
事務局	共生社会部：岸本部長 福祉共生室：鶴室長 地域福祉課：宮城課長、中井係長、森山 地域福祉課(孤独孤立対策)：中村担当課長、芦田係長
会議の公開	公開
傍聴者数	0人

1 会議次第

1. 開会

2. 協議事項

第2次三田市地域福祉計画進行管理について

3. その他

第3次三田市地域福祉計画の取組状況について

4. 閉会

2 審議経過

1. 開会

(事務局) 配布資料確認。会議の成立を報告。

2. 協議事項

第2次三田市地域福祉計画進行管理について

(事務局) 資料1の基本目標1・2について説明と振り返り。

(川本会長) 不明点等を含めて意見を伺いたい。

(古田委員) 福祉計画は本来一般市民をターゲットにしているが、資料を見ていると、団体等についての意見が多いように思う。計画で取り上げられている団体等は自分たちで活動できる人たちであり、一般市民を拾い上げてどのように伝えていく

か、またボランティア団体にどのように支援してもらうかが重要。ここに載っていない人たちが福祉を受けてもらうべき人かもしれない。その点について意見を聞かせてもらいたい。

(川本会長) 今の質問の趣旨は、これまで地域福祉に関わっていない無関心だった人たちへの巻き込みをどうしていけばいいかということ。関心を持って活動に参加してもらうための取り組みについてのご意見だと思う。

(事務局) 多くの人に関わっていただけないのが課題であると感じている。例えば、民生委員の欠員という話の中で、特に若い世代の人にどのように民生委員の存在を知ってもらうか、またどのようにして関わってもらうかを考えており、取り組みを進めているところである。各課題を広く自分事として捉えてもらう取り組みを地域福祉課だけでなく他の所管と連携しながら進めていきたい。

(古田委員) 全てすぐに出来ることではないが、役所ベースではなく視点を広げて考えてほしい。団体に属して活動している人は意欲があり自分たちで活動をしてきているが、その輪に属していない人が本来は福祉を受けるべき人たちでありターゲットである。行政だけで出来る範囲は限られているため、民生委員や自治会の力を借りるなど市民の人たちに伝えていく方法を考えてほしい。

(事務局) 基本目標1の基本施策1で掲げているように、「だれもがつながり、ふれあう機会の充実」ということで、活動していない市民の人をどのように巻き込んでいくかが大きな課題であると思う。地域行事やイベント等を通じて地域の誰もが参加できる交流機会づくりや情報提供に努めていきたい。

(川本会長) 関わりの薄い住民の参加を巻き込んでいく方法について、既に社協で取り組んでいることがあれば教えてほしい。

(畑副会長) 多世代交流というより、多様な人の出会いの場である「多世代共生」の機会をいかに作っていくかが社協のテーマになっている。誰もが参加できるではなく、参加する場所や参加の仕方を選べる、多様性の機会をいかに作っていくかだと思う。障害がある人も幼児から大人までもがその場において、交流してもしなくても良いような状況の中で自然と交流が生まれる。専門職が関わるというよりもこれまで関わりのなかった住民同士が会うことで、新たな力が育まれてきているように感じる。そのため社協として、地域の中でいろんな人が会う場面を作っていきたいと思う。

(川本会長) 既存の団体の開放度を上げていくことをしながら、徐々に無関心だった人たちを巻き込んでいく。啓発活動というよりも地域の拠点の開放をどうしていくかが大きなポイントになると思う。資料1の成果指標を見てみると、「付き合いをしていない人の割合」や、「困った時に助け合っている人の割合」が減少傾向にある。2次計画は厳しい結果を示されているように感じるが、コロナという一言だけで片付けてしまうと対策の打ちようがないと思う。この項目は、2次計画の当初中

間実績ということだと思うが、3次計画でも成果指標とされるのか事務局にお聞きしたい。

(事務局) 成果指標については、第3次地域福祉計画の69ページに記載している。

15項目あり、それぞれの項目に基づいて成果指標をまとめていく予定である。

(川本会長) もし可能であれば、この項目がどのように改善しているか見ておきたい。成果指標の前後で付随して第2次計画の成果指標をアンケートする分には問題ないと思うので、定期的に見られるように継続して行ってほしい。

(事務局) 資料1の基本目標3以降について説明と振り返り。

(川本会長) ボリュームが多いが、ここまでのことについて意見を伺いたい。

(古田委員) 資料1の7ページ以降の「支援が必要な人を見逃さないまちづくり」の中で、外国人の人についての記載が少ない。三田市には1,200人弱ほどの外国人が居住しており、今後も増えていくことが見込まれる。その人たちは生活や医療、防災について不安を持たれている。行政としてどのような支援体制があるのか。具体的に外国人の人を支援する体制が見えないことについて、どう考えているのか。

(川本会長) 第3次計画では、60ページの中で外国籍の人についてふれている。2次計画の抜粋部分には記載が少ないかもしれないが、3次計画の審議過程では、外国籍の人へのアプローチを議論していた。外国籍の人に対しての取組等あれば、事務局からも意見を聞きたい。

(古田委員) これから3次計画で取り組んでいくということであれば問題はない。

(事務局) 計画の中で、外国籍の人については、防災防犯の命に関わることを記載している。共生という面においては、人権共生推進課で国際交流を進めているが、地域福祉計画の中での記載は少ないため、3次計画を進めていく上で防災防犯に限らず暮らしていけるような視点を具体的な取り組みの中で進めていきたい。

(川本会長) 58ページの権利擁護の核になるのが人権。全ての人の権利を擁護するというのが地域福祉の基盤で、そのあたりは位置づけている。全てにおいて対象を選ばないということ、また困っているという状況をいかに克服するかが重要な視点になってくる。参加してもらおうというのも、地域福祉活動は日本人、特にご高齢の方の活動の場になっているが、多文化共生という概念の中で誰一人取り残さない枠組みの考え方を基盤に持つべき。

(大島委員) 基本的には外国人に情報発信をするという考え方は辞めた方がいいと思う。外国人は外国人のコミュニティの作り方があるのでそれをまず理解すること、そこにどうやって適切な情報を届けるかということだと思う。多言語表示も大事だが、それ以上に取り組むべき点がある。7ページの一つ目の認知症サポーター養成講座の参加者数のデータだが、積み上げデータになっていると思う。参加者数というのは、その年度に対して何人参加したかというイメージであるため、参加者数という記載で積み上げデータだと誤解を招くのではないか。全体のことで言うと、認

知症サポーター養成講座を受けた後、実際に関わって現場で使えるかという自信がない人達がほとんど。そうなった時に、アフターケアやフォローなどその次の所をある程度見ておかないと、まちづくりとして定着しないのではないかと。

データに関していうと、地域差が見えない。ウッディやフラワーや旧市街地だけでも、「隣近所と人付き合いしない割合」が違うと思う。地域差があるとどこが重点的な課題なのかが見えてくる。平均的にならされると見えてこない。危機感が伝わってこない。課題が出ているのは間違いないが、「これは考えなければいけない」という濃淡が見えてこないため、何に手をつけていいのか市民レベルでは分からない。2010年代までの基本的な考え方はセンターオブセンターだった。ここに来れば全て分かるというセンターを作り、まずここに来ましょうという考え方。2020年代は、目的を持っていくというよりも、ついでに何かに出会うという考え方に変わってきている。基幹センターはもちろん必要であるが、日常的に出会う場の工夫を具体的なプロジェクトとして考えていかなければいけないと思う。

若者支援については、相談窓口の問題がある。神戸市だと公的な相談窓口で20代30代が来ないというのが問題だと考えている。公的窓口は怒られる場所というイメージが強いため、中間クッションとなる場所が必要。外国人についても同じで、いきなり公的な窓口に行くのはハードルが高い。3次計画では、そこを意識的に取り組んでいければ良いと思う。

(川本会長) 外国人の人との共生の在り方については、今後も相談していければと思う。データの取り扱いについては、地域性をどう見ていくのかが一点。3次計画では議論してきたが、圏域をどう作っていくのかということ、どの範囲を地域という風にとらえるのかだと思う。市街地と住宅地では全く様相が違うため、そのあたりをどう分析できるのかが大きなポイントになってくる。特に人付き合いになると全く違うコミュニティになるため、そこを意識していくことが重要だと思う。二つ目は危機感。何が課題で何を取り組まなければいけないかが整理できておらず、具体的な取り組みに結びつけられていない。何に取り組まなければいけないのかについての整理は抑えておく必要がある。基本的には、住民だけではなく行政や専門職もだが、今一番重要なのは、住民に何を伝えたいのかということをしかりと説明していくことだと思う。三つ目は、センターオブセンターや分散化という概念。「ついでに」というのはすごく良いアイデア。「これをやるために相談に行く」というよりも、何かしながら情報を得られたり、つながりが生まれたりすることが重要。テクニックがいるかもしれないが、3次計画でそういう意識をもってつながりの構築をどう育ていけるのかが大きなポイントになると思う。若者支援、自殺の相談、特にひきこもりの人は夜中の相談が多い。生活困窮を含め若者の相談はハードルが高いため、どういう風に拾い上げていくのかが重要。窓口は多様であっても良い時代であるからこそ、そこをどういう風に持っていかざるべきか

ポイントになる。窓口を開いたことはゴールではない、基幹とするならばどう窓口との連携をとるか、まさに重層の枠組みそのもの。

成年後見の認知度は下がっているのに相談件数は上がっている。下がっているから認知度を上げるという問題でもない。必要な人に知ってもらう等、3次計画でどういう点を注意していけば良いかご意見をいただきたい。

(安田委員) 成年後見の認知度が下がっているというのは、正しく認知されていない人が増えている印象がある。成年後見制度と銀行の信託が同じ制度だという誤った認識もある。信託は財産的な部分を補えるかもしれないが、成年後見制度は身上監護、ご本人が亡くなるまでというところも認識されていない。成年後見制度を利用してしまうと本人の財産を勝手に動かさないため、周りの家族や本人の財産を心配している人にとっては、障害になり得る制度。いろんな思惑があって、誤った情報が出回っていることも阻まれている原因だと思う。成年後見制度はどのような制度なのかをしっかりと伝えていかないと、利用すべき人が利用できないため、利用してもらうためにどう伝えるかが重要。

(川本会長) 本当に必要な人には、話をしても理解してもらえない当事者もいるため、かなり早い段階から意識してもらって、どう適切な情報を伝えるか考える必要がある。伝えるというのも、ペーパーを渡してもなかなか理解してもらえない。何かアイデアがあればお聞きしたい。

(安田委員) 成年後見制度を利用した人のご家族が、安心できる制度だから自分も利用したいと言っておられて、言葉ではなく経験から分かることが大きいのだと感じた。また、成年後見制度は後見人が家の中まで入ってくるため、それが他人の場合、自分に置き換えても嫌だと思う。そこをどう伝えていくかが課題だと思う。

(川本会長) 親世代が70代を超えてくると、その息子娘世代がしっかりと理解しておいて、間接的に必要な人に伝えることも重要。ただ、制度を知ってもらうために動画を作成したとしても、息子娘世代の人は見ない人が多い。

(安田委員) 子どもが海外にいて両親が日本にいる場合など、必要に迫られてきちんと調べて手続きされる人もいる。その人は制度のことを調べてメリットもデメリットも知った上で親に後見人を付けている。そのため理解している人がいないわけではない。

(川本会長) 相談窓口を開いた時に来られる人はかなり勉強している人だと思う。本当に必要としている人ほど伝わらない。

(安田委員) 特に財産的なことになると、お子さんから言われるとか、自分の権利をはく奪されるのではないかと思っている人もいる。そこをどういう風に伝えていくかということも一つの課題だが、今、成年後見人をしている方の人材が不足しており、今後普及してもその人材を確保できるのかが課題になっている。評価指標で市民後見人がゼロだったことを悲しく思う。専門職は人数が限られているため、成年

後見制度が普及したとしても、後見人不足にはなってくると思う。もう一つは中核基幹。これから地域ネットワークの方で作られていくということで、弁護士、司法書士、社会福祉士が挙げられているが、人材が不足している中どうやって確保するのか。また、中核ネットワーク協議会ができたとして、どれぐらいのペースでそこに参加していかないといけないのか。イメージをつけているのであれば聞きたい。

(事務局) 今年度の設置に向けて検討を進めている。協議会への参加について、本格的に専門職に打診していくのはこれからで、どれぐらいの人に協力いただけるかは手探りの状態。会議の参画回数については、現段階で年度当初に市の成年後見センターの運営等について意見をいただいたり、専門職間の情報交換の場を設けたりすることを検討している。個別の事案については、後見人をつけるかどうかや市長申し立てすることが妥当かどうかなど、ケースの発生状況によって変わってくるため、具体的な数字は申し上げにくいですが、その都度意見を伺えればと思う。

(岡本委員) 社会福祉法人は児童から高齢者まで幅広く、社会福祉法人の施設づくりは地域の中で行っていく。近年、グループホームが発展してきており、知的障害者関係が全国的に見ても多くなっている。その方々に対してどういった形でケアしていくかということになる。グループホームは、地域の中で活動してもらいながら地域とともに歩むことが基本姿勢だが、なかなか地域の中で上手く接する方法が分からないのが現状である。昔は高齢者の人を老人会に誘うなど地域に出る機会があったが、今は地域に出ても周りとは接する方法がなかなかない。地域の中での社会福祉法人というのは重要な役割を果たすため、社会福祉法人の運営という点においても、責任を感じている。そのため、地域の中での対応について、連絡調整できる環境を作っていきたい。

(川本会長) 施設と地域をどう結び付けていけるのか。また、そのような機会と場があるのか。施設に入って地域との距離ができることが多く、特に高齢で入所すると「施設の人」という認識になり、地域の人ではなくなってしまうような捉え方が強い。地域との関係は良いばかりではなく真逆に走ることもある。特に精神障害や知的障害になってくると、グループホームがコンフリクトの火種となることもある。福祉を進める場合に、地域の人たちの理解を深めることや社会福祉法人と地域を結びつける機会を設けることが大事。施設と地域のイベントについて、社協側の意見を聞きたい。

(畑副会長) 社会福祉協議会では福祉教育の一環として、学校で手話や視覚障害の疑似体験をする福祉学習を行っている。その中で地域にある施設との交流を進めている。地域にある施設または作業所に行き来している人は、普段子どもと関わる機会が多い。その人たちを変な人として通報してしまうケースがある。日常的に出会い、知り合いになることで、そのようなことがなくなるのではないかと思い学習につなげている。認知症や精神障害、知的障害などの見えない障害に対して、理解を

どう進めていくかが重要。

(古田委員) イベントを実施して施設や地域の人に出来るだけたくさん来てもらって、交流の場を作っていこうと思っている。

(川本会長) これらの課題を3次計画にどう引き継ぐかというところが一番の使命である。推進の段階に移っている計画ではあるが、適宜ご意見をお寄せいただければと思う。

4.その他

(事務局) 第3次地域福祉計画の取組状況について説明。

(畑副会長) 三田市社会福祉協議会の重層的支援体制の整備に向けた取り組みについて説明。

(川本会長) 対象者を選ばずに全てをどう受け止めるかが重要。属性を問わない相談をどう受け止めるかという議論を包括や重層の枠組みで行っている。実行、実施にあたって行政や社協が密な連携をとっていくことが重要な軸になる。情報を共有しながら行政と社協が共に歩んでいくものになる。次回以降情報共有いただければと思う。

(大島委員) 適切な予算を組んでほしい。福祉の現場は低賃金の状況が続いており、待遇改善も含め事業委託には無理のない予算を執行してほしい。市と社協の役割が大事だというのはよく分かるが、多様な事業者が参加しないと活性化していかないと思う。例えば、第2次計画の中で高齢者向けのコミュニティビジネス投資者支援事業があり、専門性があるから受託しているのだと思うが、アイデアやノウハウを市外に流出しているため、市内の事業者が育たない。市内の事業者で専門性を高める人が出てこないと、地域の活性化につながらない。地域に循環していくような取り組みが必要。

(戸出委員) 2次計画の中で支え合いづくりとして共助の重要性を述べている。支援する一つの施策として助成金、補助金があるが、担い手である区・自治会の活動を中心に取り組みを行ってもらいたい。その中で、ふれ協やまち協の活動費用への助成というのが実施状況として挙げられている。地域でのネットワークづくりとして共助の活動が大事だと思うが、自治会等の総会の場で食事の提供も必要になってくる。交付金の中では制限が強く、地域のネットワークづくりを推進していく中で弊害となっている部分もある。制限の緩和を検討してもらいたい。

(畑副会長) 市の広報としてサイネージを設置しているが、その中で成年後見制度の動画を流すことも一つだと思う。また、災害ボランティアセンターについての記載もあったが、実際にコロナになった時に災害ボランティアセンターと福祉避難所が一緒なのはあり得ないと思う。避難所の訓練の所が、感染症を持ち込む可能性のある多数のボランティアが押し寄せることを考えると、一緒の場所で良いのか議論が

必要である。また、人員不足はコロナだけが原因ではなく、働く世代が増えたことが挙げられる。働いていても民生委員が出来るなどの仕組みが必要。ボランティア休暇を民生委員活動の休暇として実施してもらえないか働きかけることも重要。働いている人も参加しやすいように会議を夕方にするなど、働いていても参加できるように考えていく必要がある。

(川本会長) 3次計画にどう反映していくかが重要。引き続き議論して行ければと思う。

5.閉会